哲人に芸術なし

森田亀之助

○哲人に芸術なし

この稿は本文中にもあるように，私の恩師故岩村透先生の紀念会に於ける講演筆記を基として，その直後，美術雑誌『アトリエ』と記憶するが，それに活字化されたものである。講演の場所，年代は右の雑誌がないので，正確とは言へないが，年代は昭和十二年（岩村先生二十週年紀念会）場所は日比谷の朝日講堂であつたことは，ほぼ間違いない。

本学報に用いた草稿は，大分以前，福井県鯖江高等学校の西教白洋君が，蕪稿掲載の雑誌は所有しておられるが，それは割愛できぬからとて，態々原文を筆録し，送付して下さつたものである。その御親切に対し，茲に更めて厚く御礼を申します。

（因に記す。岩村透先生は，明治年代，どこの大学でも西洋美術史の講座なぞなかつた時代，東京美術学校（現在芸術大学）で，始めて之を講じられた教授。大正六年逝去。享年四十八歳。厳父高俊氏は，明治十六年石川県令として，金沢に赴任されたことがある。先生に就ては，清見陸郎著『岩村透と近代美術』に詳しい。）

私自身長年美術界の空気を呼吸して生きてきながら，「芸術無し」などと，如何にも芸術を軽蔑したやうな演題を持出したのは頗る変なことでありますが，これは決して芸術否定論ではありません。今夕，此講演会に依て紀念さるる岩村透先生は甚だウイットに富んだ方でありまして，警句や皮肉が口を衝いて出る。その説かれるところも世人の意表に出で，一寸見には逆説的（パラドキシカル）な形を採ることも尠くない。

私などは，御断りする迄もなく，先生の造詣識見には及びもつかないが，それだけに皆さんが私の話を聴いてくれるかどうか心元ないので，先生流の形式だけ真似てわざと風変りな題目を付けた迄であります。之で話の内容さへ良ければ問題は無いのですが，それが甚だあぶなかしいから，結局，鬼面人を嚇かす，或は羊頭をかかげて狗肉を売るの類かも知れませ

ん。其辺は前以て御詫して置きます。

私が如何に皆様に御世辞を言ひ度くとも，今夕茲に御集りの方々全部が，謂はゆる哲人だとは，余り空々しくて言へません。尤も五人や十人位は居られるかも知れませんが，私の話など，左様な方々には本当に釈迦に説法でありますから，私は勿論，皆様も同様俗物—と申しては失礼だが，非哲人—未だ哲人の境地に達せぬ階級にあるものとして，御話をするのであります。

私が只今から申し述べたいと思ふ本旨は，「哲人には芸術は無くてもよいが，俗人には芸術があつた方がよいのみならず，それが必要だということである。何故必要であるかといへば，其の重要な一つの理由として，芸術は俗人を哲人化する捷径である—芸術に依て我々俗人は，容易に到達し得ぬ哲人の境地に入ることができる—少くとも其の境を覗く事が出来るからだ」といふ事を説明したいのであります。私が茲に哲人と申すのは，小さなわれ即ち小我—それに着き纏つている利害観，損得観を超越して，大きなわれ即ち大我に徹した人，謂はば悟りを開いた人—さういう人の事であります。

併し，例えば，竹林の七賢の如く，虚無恬澹を主義とし，俗塵を厭離して山林の間に逍遥するといつた人などを専ら心に描いている訳ではありません。モツト世間に近くして而も世間を超越したといつたやうな人を考えています。

かかる人々にとつて美術とか芸術とかいうものは如何なる関係を持ちましようか，それを説明する前に，先ず一応，美的現象なるものについて少々考えてみたいと思います。

芸術家は職業として常に美的現象を捜し出し，観察し，そしてそれを紹介したり，造り出したりする，美的現象に就ては実際的な，専門家であります。然るに此専門家の観る美的現象と，一般の人の観て以て美とするものとは大分其範囲の広さが異なり，時には喰ひ違ひさへある。此点に対し皆様の御注意を喚起したいと思います。例えば対象が美人などなれば，これは文字に依ても判る通り，誰れでも，それが美しいということに異存はないが，皺だらけの老婆が雑巾のやうなチヤンチヤンコを着，背を丸くして日向ぼつこでもしているのなど視ては，何人も，「アア美しい，アア美人だ」とは云わない。併しレムブラント，ジョセフ．イスラエル，ミレーなどの大画家は此種のものに美しさを認めて画いた。又，日光廟は，「日光を看ずして結構というな」と言われる程一般的に美しいと思われている。而して，ぢぢむさいぼろ長屋のたて込んだ裏街の光景など，一般の人は決して美しいとは言わぬどころか寧ろ醜なりとする。然しさういう薄穢ない裏町光景に美しさを見出して描いた画家

は東西共に近代では珍らしくない。返つて日光廟の美しさなどは月並だといつて軽蔑される位である。皮肉な事には，近頃，東京日々新聞に，『都市美，都市醜』と題して，画家達にそれぞれの場合を代表する街衢景観をスケツチさせて掲載して居りましたが，醜なりとする光景も，美なりとする光景に比して，少くとも同様に面白い。寧ろ英語でいうPicturesqueな美しさは醜の方に多いと感じたのは，私ばかりでもないやうです。巴里の共同便所なども屢々画中に現はれて，其美観を助けています。馬糞など誰れも美しいと思ふ人はありますまい。然し俳人子規は之に美を認めて，『紅梅の落花燃ゆらん馬の糞』と一句作りました。

芸術家の美感と一般人の美感と如何してさう違ふか。是は芸術家は純観照の態度を執るに対し，一般人は実際生活の態度そのままで臨むからであります。即ち自已生存上の利害判断を根底に置いて観るから，美しさに対する眼が曇らされるのである。例えば美人に就ても，Guyau は Le prodlem de L'esthetique Cortemporaine に於て。「一般民衆にとりて美人といふのは，丈夫で血色も肉附きもよい大柄な婦人，而かも性的本能を最もよく満足せしめ得るような婦人である。上流階級に於て，其美感が人種的又は個人的の原始要求に同程度の精密さを以て当てはまらないことのあるのは，それは其等要求が一般風習の為に変形され，漸次精練されて来たからである。吾人の眼に最も美しき婦女とは常に，吾人の個人生活の慾求と，時代に従つて我々に共通する情操，傾向とに最もよく適合する婦女である」といつている。詮まり一般人の美人に対する感情のうちには，無意識的にせよ，種の保存という実際的慾求が介在しているのである。老婆などは此目的に適はぬから決して美人たり得ない訳です。又，不潔な陋巷や，動物の排泄物等は，病菌毒物の温床となり易いと知つているから，此等のものには不快感，醜感が殆んど先天的に固着している。然し若し此態度—即ち実生活上の利害観を棄てて此世界を眺めたら何うであろう。色と形の美しさは必ずしも若き美人の独占ではない。老爺，老婆は勿論，蟾蜍(ひきがえる)にも蜉蝣(ばつた)にもある。白馬銀鞍の貴公子のみならず，農夫，労働者，バタヤから，月漏る賎が伏屋にも美しさは充満している。

私は考えます。我々は生きていること—それだけで既に愉快なのである。此世界は総て美しいのである。然し美しいと思い，愉快と思うために，「生」というものに執着が出る。誰れでも死に度く無い。そして出来るだけ愉快に暮したいと思う。かくして我々には，生活から割出した利害損得の打算が起る。仍で又皮肉にも，其利害観の為に本来愉快なるべき生活が不愉快にもなる。世の中が住みにくくもなる。でありますから，（第一）には利害観念を問題にする必要の無い場合か，或いは（第二）利害を放擲し得る場合には，すべてが美しく

なる。例えば，虹を眺め，星を眺め，山水を眺める時，これ等のものが何か我々の生活に実質的利害の影響を与えるかどうか—そんなことは，少くとも科学者ならぬ，我々には無頓着のことであるから，それを美しいと眺めることが出来る。（それが実際的利益を齎らす場合には一層快感は大きいが，此場合の快感を美感と同視することは其間に種々の問題が起る，ここで解決すべく余り複雑故省略します。）

第二の場合—即ち利害観念が必然的に着き纏う場合，此場合，利害観を振り捨てるということは，百人が百人できることではない。一般の人には可なりむずかしいことであります。だから多くの人は，美しかるべきものを美しいと思わずに暮している。而して此世の中は大抵醜悪なりと思つている茲に芸術などの存在理由が生ずるのです。

却説，再び哲人に戻りますが，元来利害の打算は其根底に生活や生死の問題がある。哲人は生死の問題さへ超越した人でありますから，況んや利害の問題をやです。かかる人々にとりては此世が其のまま芸術であります。天正十年，かの慧林寺の快川和尚が織田信長のために，山門楼上に他の老弱と共に焼き殺さるる時，泰然椅子に拠り，「安禅何ぞ必ずしも山水を須いん，心頭を滅却すれば火も亦涼し」と唱えて遷化したそうですが，生死の間に在つてさえ此態度を持することが出来れば平常は無論のことで，悟つた人には山水も，身を焼く猛火も同様と見える。況んや実人生も劇も差異は無い。此の境地に於ては恐ろしいものもなく，嫌いなものもなく醜なものもない。只極楽あるのみであります。

私は自から悟りを開いたことがないから，口はばたいことは言えませぬが，読んだり聴いたりしたところで想像すると，仏教の悟りの境地と，芸術鑑賞の心理とは甚だ似ているやうに思います。仏教で最も玄妙な真理（実大乗）では一切空と説きます。然し此空たるや常識的な単なる空ではない。色即是空である現象そのままの空である。砕いて言へば，人間だ，犬だ，猫だ，杓子だといつても，元々一切空だからそんな区別のあるべき訳はない。有ると思うのは心の迷ひであつて，其為に又，惜しい欲しいの煩悩を起す。これは誠に愚の骨頂，須らくそんなものにこだわるな—恁ういつてしまえば全く世話はない。これは謂わゆる頑空に堕したもので，その様な考えの人は冷灰枯木の如く，生きながら死んでいると同然である。死んだ人には悟りも無用だある。仍で矢張り平等即差別，差別即平等，換言すれば非有非空，亦有亦空で，本体其のまま現象，現象そのまま本体といふところまで行かねば本当の悟りでないそうです。

之を美的観照の心境に就てみる。例えば，山中の湖水を眺めて，この水力を利用したら幾

くら儲かるだらうかと考えたり，女人裸像を看て意馬心猿を狂はしたりすることは，真の鑑賞態度でないことは多くの人の言うところです。勿論此等功利的な考へは本来差別観から生まれた煩悩で，真の観照から視て邪道であることは明白であるが，さりとてかかる差別観を根本から廃棄したらどうでありますか。矢張り仏教の所謂頑空的虚無に帰しはせぬでせうか。本当のところは左様な利害観や意慾にのみ専ら束縛されるからいけないのであつて，決して，少しでも其れに類似の観念や感情が含まれては観照が成立せぬとは言はれぬ。

それどころか，或る程度迄はそれが必要でさえあると思います。先きの例を採れば，湖水は山中の凹処に水の溜つたもので，そこには多くのエナージーが貯蔵されてる。女人は，牛でない，馬でない，人間のうちでも男でもなければ子供でもない，青春の血漲ぎる若き女であると観ずることは勿論我々が生活上の利害観から分類した差別観であるから，唯これだけに捉はれていては，形式の美しさを鑑賞できない。然し反対に湖水も馬も人間も猫も，等しく自然形体の一部であつて，唯形が異なるだけである—と，それだけの考えで之を眺めたらどうでせう。何か物足りぬものがそこにありはしまいか。寧ろ湖水にしても，それはエナージーを貯する山中の水溜りには違ひないが，それが懸崖に於て飛瀑となり，渓谷中に奔湍となり，山峡中に碧潭を現するという聯想も起つたりして，隠約の間に美感の量を増すことになりはしませぬか。美人像も，単に美しき自然形体として観るより，やはり若き女人の肉体で，其裡に溌溂たる生命が蔵され心の鼓動も認められるじやないかと観るところに，一層其美しさが高揚されはしませぬか。詮まり之は仏教的に言えば，有無の間を悟るので，差別其のままに平等を観じ，平等と同時に差別を味うことになる。然し此心境は間一髪であつて，一歩を誤れば天地懸隔するのである。

かかる微妙な観照態度は，芸術品に対してなら比較的容易にとり得るが，実生活上の経験では甚だ困難なことが多い。芸術に現はれた世界は，謂はば水中の月で，之を捉らえんとすれば消えて跡がない。故に一般の人々でも始めから秘かに其積りで対することができる。それでさえ時には，実世間の態度を捨てきれぬ人があるので，警視庁が気を揉む必要も生ずるのである。ですから実世界に於て終始観照的態度を持し得る人は哲人だけであります。哲人にとりては此世界が其のまま芸術世界である。絶対見地からすれば，哲人には善悪美醜は無い。如是の世界が如是の状態で現ずるだけであるが相対的に言へば，哲人には悦びあるのみ，美あるのみです。従つて哲人は同時に製作せざる芸術家でもある。かかる人に何で芸術

の必要があるでしようか。夏目漱石の『草枕』に，「この故に，無声の詩人には一句なく，無色の画家には尺縑なきも，かく人生を観じ得るの点に於て，かく煩悩を解脱するの点に於て，かく清浄界に出入し得るの点に於て，又この不同不二の乾坤を建立し得るの点に於て絆を掃蕩するの点に於て，千金の子よりも，万乗の君よりも，あらゆる俗界の寵児よりも幸福である」と言つている。之は芸術家の心境について言つたのであるが，そのまま，哲人の場合に当てはまるのであります。これで大体，哲人に芸術無しといふことを説明したつもりでありますが，私の話の目的は一般人には芸術が必要ということを説くにあることは冒頭に御断りした通りでありますから，尚之について少々補説することを御許し願います。扨て，芸術家は皆哲人だということは勿論言えません。が然し，芸術家は哲人と目的方向を同じくする故に，芸術三昧に入つた時には，俗人の境地を脱却し，真の幸福を求め，進んでは自他共に人類全般の幸福を体得し得ることを目的とし，其の真理を体得し得るのであります。少くとも左様な意味で，芸術家というものは其価値を持つものです。芸術も其第一義は，同じ真理に依つて人生を幸福にせんとする一つの手段で，芸術家は此目的のために働く人間であります。—であるべきです—漱石の『草枕』を再び引用すれば，「兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが嵩じると，安い所へ引越したくなる。何処え越しても住みにくいと悟つた時，詩が生れて，画が出来る。」とある。

住みにくいというのは，利害で相争つてるために此世の美しさを見落してる小うるさい実世間である。易いところとは利害や理屈を超越した芸術界である。従つて芸術家の観照する世界と，哲人の観照する世界とは一致する訳であります。唯，哲人と画家との違ひは，哲人は二六時中，行住坐臥の間，悟りの態度を失はないのに，芸術家は芸術的労作をやつている間だけで，其以外の生活では一個の俗物に還ることである。尤も之は人にも依りますが，芸術家が実生活に於ても終始芸術的であれば，それは既に哲人であります。火事の火焔の美しさに魅せられて，己れの家の焼失するのをよそに，懸命に写生したという画家の逸話ありますが，此の場合など全く芸術三昧で，美的観照に徹し，利害を放擲した点，哲人の境地であります。然し，前に話した快川和尚の場合の如く，それ自身の肉体を焼く火であつたら，どうでしたろうか。ここが哲人と芸術家の別れ目であります。

哲人以外の一般の人も，人生の幸福を希ふ点は変りませんが，一般人は幸福というものの内容に就て哲人と見解を異にしている。一般人は実生活に直接実質的な利益と快を齎らすものを専ぱら幸福と思つている。うまいものが食いたい，立派な家に住み度い，威張り度い，

賞められたい，といつた様な類です，之もそれ自身悪いことではないが，然し之は稍もすると，他人乃至己にまで不快，不利益を持ち来たす惧れを充分含んでいる。結局，幸福の快を望んで，屢々，不幸，不快を招くという矛盾を含んでいる。此点哲人の求むる幸福は左様な矛盾がないという徳がある。さりとて私は一般人の実利的態度の全部を否定しようとは思はない。此態度無くしては我々は生存上危険もあるし，従つて今迄人間は生存上此態度を執るべく余儀なくされたのである。であるから例えば，先刻の都市醜でも，それが如何に絵画の題材として美であつても，実生活上からは排斥すべきである。醜と称しても差支えは無いのである。我々は芸術美のために不潔，非衛生な環境を辛棒する必要はないのです。唯，脱実した—つまり芸術化された題材として迄排斥される必要は無いだけであります。

私の考えている哲人でも，此実生活態度を全然捨て去つているものではない。必要な程度，若しくは許される程度に於て此態度は保存されねばならぬ。生存上からは勿論，観照態度をとる場合に於てもである。例えば，如何に利害を超越し，火も亦涼しなどという老哲でも，好んで焔のうちに身は投ぜないのである。

生に害あるものは避け，利益あるものに近くは当然である。唯，一般人は因襲久しきため習性となり，又人間の慾望が際限なき為，必要以外に実利快楽を要求し必要以外に毛嫌いをする。その為に，要でもなき苦労を背負ひ込み，又苦と観ぜずともよいもの迄苦と思ひ，世界の美しさが見えなくなるのです。さうは言うものの，此利害観を脱却することは我々凡俗には中々容易ならぬことで，仮令理屈で判つていても之を実行することが中々できない。従つて此現実世界はそのまま芸術にはならない，それ故特に芸術というものが必要になる。復再び『草枕』の一節を借りますと「住みにくき世から，住みにくき煩ひを引き抜いて有難い世界をまのあたりに写すのが詩である，画である。或ひは音楽と彫刻である。」と恁ういうことになる。

哲人なれば「写さないでもよい，只まのあたり見れば，そこに，詩も生き，歌も湧く」のですが，凡俗では矢張り芸術家を煩はさねばならぬ。芸術家は一般人の代理者となつて，此現実のうるさい世界の到る処から，芸術境を摘出し，創造する。漱石の謂はゆる有難い世界を提供する。而かも芸術作品に現はされた世界は，実質を脱した，—謂はゆる仮象という様なもので，先の比諭を繰返せば，水中の月の如きものであるから，実在感はあつても，実在の質はない。従つて誰れでも容易に観照境地に入ることができる。であるから，何人でも，音楽を聴き絵画，彫刻，演劇を観たり，小説を読んだり，つまり芸術を鑑賞してる間は，哲

人の境に在る。仏教なら，悟りの境地を覗くことができる。此点，芸術は美の宗教であるとも言ひ得るのであります。

誰れでも，自分の家庭に悲劇が起つたなら決して幸福とは感ぜられないでしよう。然し人が演劇を観。映画を観て，それに現はれる悲劇中の人物に自己を投入し，我身につまされつつ，而かも我を忘れて，泣きながら面白がる心理は一体何でしよう。面白がつて泣き悲しみに行くのだから，考えると不思議でありますが，これは，芸術化されてあるため，観照的態度を執り得るからであります。実生活に於て，自己を中心に起つた悲劇にも，かかる観照的態度をとり得れば，それは確かに哲人であると言へます。反対に真に芸術を鑑賞し得る人は，少くとも其間は哲人になつたものと言うことができると信じます。

＊　＊　＊　＊

餘白があるので，藻塩草ではないが，拙稿に縁ある埋草をかき集める。

○半世紀も前旧友辻永が個展を催した折，私は或る紳士(身分氏名はわざと省略)を案内してお買い上を願つた。十二号位の竪繪で，中央右寄りに喬木があり，その根本の近く小屋がある——それが氣に入つたと云はれる。早速その旨を傳達しに行こうと思つた時，突然亦偶然に，「この小屋は何の小屋でしようか」という質問，仍で私は辻のところに行つた序でに聞いたら，それは屠殺小屋だという。私は正直にその由復命したら，とたんにお客様は嫌やな顔をされ，『これは止めましよう，他に何か』ということになりました。この観賞態度に對する批判は讀者にお委かせします。

○明治四十三年私は，『美術新報』第十巻第十一，十二号に，アンリ・ル・シダネエの評傳を連載したが，この人は十九世紀後半に活躍したフランス画家で，評家の謂ゆるアンチミストの一人である。これは佛語アンチーム（英語のインチメート）から出来た名詞で，温かく美しい人間味を描く画家という程の意味。作例として，「食卓（ラ・ターブル）」を採つてみる。前景には晩餐後の食卓が描かれ，その背景に稍隔たつて住宅の一部，その窓から室内の照明が明かゝゝと見える。人物は一人も描いてないが，さりとて只の風畫ではない。楽しい人間生活の詩が泛つている。かかる感情は，單に造形々式美だけでなく，常識的差別観も依存するものであるが，然しこの画境は十分繪画領域に属するものでありそのつもりでの観賞態度も正當である。埋草も一杯となつたので擱筆します。

（昭和三十八年十一月二日記）